



現役熊学生の今をご紹介します。

きらり☆輝く 熊学生 Vol.16

瀬野 智博さん

外国語学部東アジア学科3年
熊本学園大学付属高等学校出身

全日本中国語スピーチコンテスト 熊本県大会 2年連続最優秀賞を受賞

地面を突き上げる轟音とともに、陳列棚から投げ出されるガラス瓶。響き渡る悲鳴。4月14日、熊本地震の最初の揺れが襲ったその時、アルバイト先のスーパーにいた瀬野智博さん（東アジア学科3年）。自身の体験や皆が復興に向け協力し合う姿から学んだことを中国語で話した「第34回全日本中国語スピーチコンテスト」熊本県大会のスピーチ部門で、2年連続となる最優秀賞を受賞した。主催する日中友好協会の音声審査を突破すれば1月の全国大会への切符を掴む。

言葉で伝える心の機微

初出場で臨んだ昨年の全国大会は、難関を突破した出場者10名のなかで7位の結果。実力を知り、悔しさをバネに一年間勉強に励んだ。「文章を考えて中国語に翻訳し、発音やイントネーションの細部まで追求して練習します。その過程のなかで、自分が話す中国語の弱点が見つかる。スピーチを通して語学力が飛躍的に上がるんです」。約5分間で構成されるスピーチの内容は日本語で書き出し、まずは中国人の留学生と翻訳作業を行う。お互いの言語で伝えたいニュアンスを説明し合い、原稿を一緒に磨き上げていく。留学生の寮や図書館で夜遅くまで意見交換することも。「例えば日本語の『絆』という言葉が中国語に訳すと、やや束縛

的な意味を含んだ『羈絆（ジーバン）』や、人と人とのつながり・温かみを表現した『紐帯（ニョーダイ）』などがあります。一つひとつの単語も語源から調べ、分からないことは学科の先生にも尋ねてより相応しい言葉を選びますが、とても奥が深くて楽しい」と目を輝かせる。

人の温かさに触れ積極的に

高校の現代文の教科書で読んだ鲁迅の短編小説「故郷」。もともと読書は好きだったが、心から感動した作品だった。「温かくて、風刺的で、思想的で。初めて中国文学に触れて、中国そのものに強く興味を持つようになりました」。中国について本格的に勉強したいと、本学の付属高等学校から東アジア学科へ進学。2年生の時に台湾の国立台湾師範大学での1カ月の研修に参加して殻が破れ、自ら話しかける積極性が身についた。「その時にはきっと滑稽な中国語しか喋れていなかったけれど、伝わる喜びを知りました」。道に迷えば行き先まで案内してくれる街の人も。国籍とは関係なく一人の“人”として接してくれることが新鮮だった。帰国しても現地大学生との交流は続き、SNSを使って言葉や文化に関する質問をぶつけ合う。「ものすごい数の日本語の疑問が矢継ぎ早に送られてきます。そこまで日本語を勉強してくれているのが嬉

しいから、こちら全力で答える。もう根比べのようなものです（笑）」

夢は国境を越える

今冬の2月から、中国の北京第二外国語学院に1年間留学する。「心配する両親を説得して得られた貴重な時間。現地のリアルを学び、自分の力を最大限まで引き上げたい」。中国語検定一級と、通訳案内士の資格を取ることも今後の大きな目標だ。「将来は観光業など、中国と日本をつなぐ仕事がしたい。多くの人に本当の日本の姿を知ってもらい、両国の友好がさらに深まれば」

国を越え、大きな夢が花開く。瀬野さんの挑戦は、まだ始まったばかりだ。



語学研修で知り合った台湾師範大学の“親友”章傑（ショウ ケツ）さん。彼との出会いが人生を変え、友情の輪が広がった